

モントゴメリーとイギリス第8軍



第二次大戦においてイギリスの最も有名な指揮官であるモントゴメリーと、彼の下でロンメルを打ち破ったイギリス第8軍の北アフリカにおける勝利の記録

白石 光

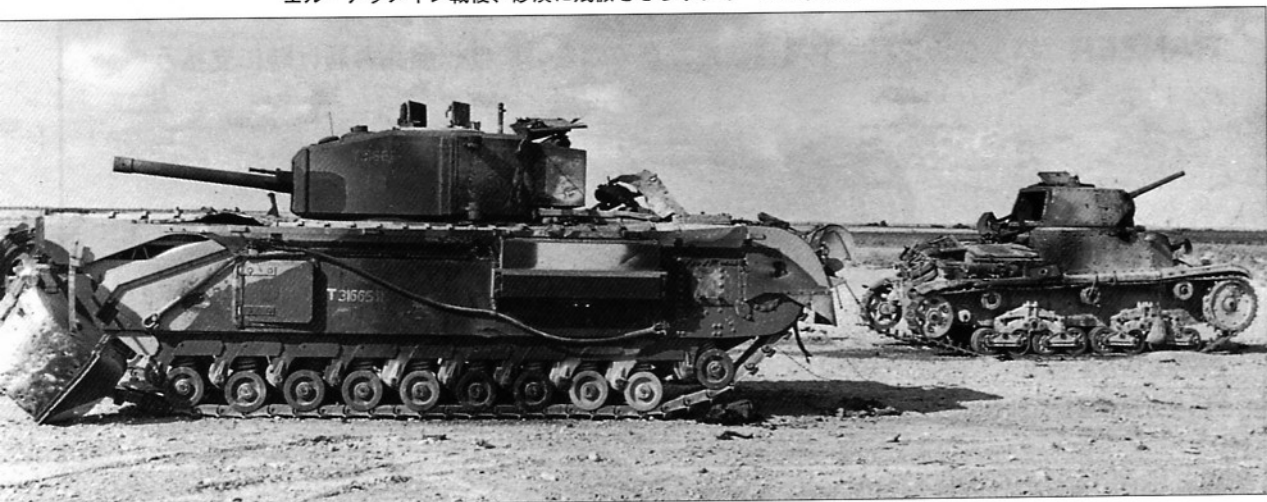
§ チャーチルに嫌われていた男

1942年8月7日、スコットランドで実施されていた大演習を視察中だった南東軍司令官バーナード・ロウ・モントゴメリー中將（愛称モンティ）は、陸軍省からの緊急連絡を受領した。その内容は、ハロルド・レオフリック・ルパート・アレキサンダー中將（愛称は“アレックス”）の後任として速やかに第1軍司令官

に着任し、北アフリカ派遣連合軍総司令官であるアメリカ陸軍中將ドワイト・アイゼンハワー（愛称アイク）の指揮下に入り、「トーチ作戦」（北アフリカ上陸）の立案に参加せよ、というものだった。

モントゴメリーは当時、急に指揮を受けることになったアイゼンハワーというアメリカ人の将軍について全く知らなかったため、この新しい任務に少なからぬ不安を抱いていた。ところが翌8日早朝、モントゴメ

エル・アラメイン戦後、砂漠に残骸をさらすチャーチル戦車とイタリアのM13/40中戦車





リーが洗面をしていると、再び陸軍省からの緊急命令が電話で伝えられた。それは、昨日の連絡内容はすべて反故とされ、代わりにエジプトに赴任して第8軍司令官に就任すべし、というものだった。

これを聞いたモントゴメリーは気分が晴れた。というのも、アレキサンダー中将の転出先が中東方面軍総司令官職であることを前日に聞き及んでおり、第8軍は同方面軍の令下にあったからである。アレキサンダー中将とモントゴメリーは、1940年5月末から6月初頭にかけて実施された「ダイナモ作戦」(ダンケルク撤退)において、BEF(イギリス欧州派遣軍)の第1軍団を前者が、第2軍団を後者が指揮し、共に苦しい撤戦をやり遂げたという間柄であった。

BEFがヨーロッパに展開した当初、モントゴメリーは第3歩兵師団長を務めていたが、戦況の激変により、少将ながら野戦任官で第2軍団長に就任した。その後、第1軍団長職が空席になったさい、モントゴメリーはBEF司令官ジョン・ゴート大将对して、第1歩兵師団長だったアレキサンダー少将(当時)を同職に補すべきだという意見を具申し、この人事を実現させたのである。

ゴート大将といえば、誉れ高き大英帝国陸軍参謀総

長を歴任した重鎮であり、一介の若僧である少将ごときがものをいえる相手ではない。にもかかわらず、自らが正論と思えば堂々と意見を具申するところがモントゴメリーの剛直さであり、この事例のようにそれが認められることも多かったが、逆に、いくら正論といっても歯に衣を着せないものいいとその出しゃばりが、相手の強い反感を買ってしまうことも稀ではなかった。

さて、こうして肝胆相照らす直属上官を得たモントゴメリーだったが、この人事の裏側には、ひとつの悲劇があった。

実は当初、第8軍司令官職には、ウィンストン・チャーチル戦時内閣首班の肝入りで、同軍令下の第13軍団長を務めていたウィリアム・ゴット中将が内定していた。ゴット中将は、中東方面軍きっての砂漠における機甲戦の権威で、勇将としてもその名を轟かせており、いかにもチャーチル好みの人物であった。

ところがそのゴット中将は8月7日、激務の合間に得た短期間の休暇をカイロで過ごすため乗り込んだプリストル・ボンベイ輸送機がドイツ軍戦闘機によって撃墜され、あえなく戦死してしまったのである。そのためチャーチルは、気難しく高慢ちきなモントゴメリ



中東方面軍司令官H.アレキサンダー大将

幕僚から戦況の報告を受けるモントゴメリー（中央）←

ー（それゆえチャーチルは彼を嫌っていた）を、やむなく第8軍司令官に任命せざるを得なくなったのだった。

セクション北アフリカでの下準備

8月12日早朝、カイロ郊外の飛行場に降り立ったモントゴメリーは、メナハウス・ホテルに投宿すると手早く朝食と入浴をすませ、中東方面軍総司令部に出頭した。そしてまず、離任直前のサー・クロード・オーキンレック大将（愛称オーク）と面談した。オーキンレック大将は、先にドイツ軍の攻勢を撃退した第一次エル・アラメイン戦における心労がまだ抜けきっていない様子だったという。

この時オーキンレック大将は、中東方面軍と第8軍

の指揮権の移譲を、8月15日に同時に行なおうと考えている旨をモントゴメリーに伝えた。というのも、当時のオーキンレック大将は、一時的に中東方面軍総司令官と第8軍司令官を兼務していたからである。

続いて、すでに到着していたアレキサンダー大将（昇進）とも顔を合わせたが、ここで、モントゴメリーは早速、自らの腹案を提示した。それは、機動力に富んだ諸兵科連合の装甲集団—しかも各兵科の連携がスムーズに行なえるだけの練度を備えた—を、ここ一番のときの予備兵力として、第8軍内に保有すべきだというものだった。

長い伝統を誇るイギリス陸軍の各兵科は、伝統的であるがゆえに兵科ごとの優越意識や差別意識が根強く、それが原因となって、異なる兵科との連携がギクシャ



ドイツ軍の攻勢からイギリス軍を支えたM3グラント戦車

新装備シャーマン戦車の手入れをするイギリス戦車兵



クし易いという本質的な欠点を持っていた。これに対して、第一次大戦に敗れて一度解体されたドイツ陸軍は、再軍備化にあたり、ベルサイユ条約で認められたその兵力を最大限に活用するために、苦肉の策として兵科間の連携を重視した合理的な部隊運用を大いに研究した。

このような背景があったため、第二次大戦の緒戦の時点でのドイツ陸軍は、イギリスやフランスの陸軍よりも兵科の連携に長けており、効率的な戦闘を展開することができた。そしてモントゴメリーは、アフリカにおけるドイツ軍の強さの秘密が、単にエルヴィン・ロンメルの優れた指揮能力だけでなく、ドイツ軍における兵科の連携が絶妙であることも大きく影響していることを、自身もフランスで当のドイツ軍にしてやられた苦い経験から、肌で感じ取っていたのだった。

北アフリカでドイツ軍とつば迫り合いを演じている第8軍への赴任がわずか4日前に決まったばかりであり、以前から同地の戦いに特別関心を持っていたわけでもないにもかかわらず、モントゴメリーは、多忙極まりない転任業務の合間とイギリス本国からエジプトまでの移動の時間を利用して、アフリカ軍団の強さの本質——いい換えればドイツ陸軍の合理性とロンメルの卓越した指揮能力——を、その明晰な分析能力をもった的確に見抜いた。そして自らも、それを模倣した戦力を令下に保有しようと考えたのである。

アレキサンダー大将はこの意見具申に即座に賛同し、モントゴメリーは第10軍団を新たに編成することにした。先に記したように、指揮権の正式な移譲は8月15日に行なわれることになっていたにもかかわらず、モントゴメリーは独断専行で矢継ぎ早に物事を進めていたわけで、実際、13日に第8軍司令部に到着すると、同日1400時から同軍の指揮をとるという連絡を中東方面軍総司令部に打電しているが、これは厳密には命令違反であった。

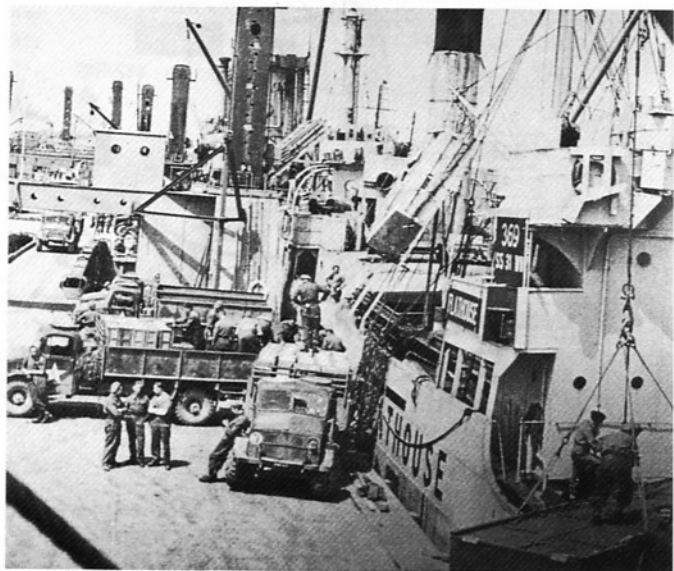
またモントゴメリーは、第8軍の参謀長フランシス・ド・ギングント准将（愛称フレディ）とは良好な関係を構築し、ゴット中将の以前のポストである第13軍団長にブライアン・ホロックス中将をイギリス本国から呼び寄せ、第30軍団長だったハーバート・ラムズデン中将を新編成の第10軍団長へと異動させ、第30軍団長にはオリバー・リース中将を配した。

唯我独尊のモントゴメリーも、さすがに自分より上位の人事はどうにもならないが、その上官が彼にとっ

てはこれ以上を望めないアレキサンダー大将であり、下位の人事に関しても、自分の好みを通したのだ。

ちなみにラムズデン中將は、モントゴメリーが第8歩兵師団長時代の大隊長の一人であり、ホロックス中將もまた第3歩兵師団長時代の大隊長の一人で、かつてモントゴメリーの推薦によって旅団長から師団長へと昇格した人物であった。こうして「モンティ家」が徐々に形作られて行ったのである。

さらにモントゴメリーは、枢軸軍が強力な攻勢を加
北アフリカのイギリス軍には続々と支援物資が到着した





制空権を握ったイギリス軍はドイツ軍の進撃を大いに妨げた

シャーマン戦車の登場はドイツ軍にとって大きな脅威となった→

えてきて戦線を支えきれなくなった場合には、ナイル・デルタまで退却するというオーキンレック大將が策定した緊急撤退プランを総て撤回すると共に、次のような訓令を下达した。

「本日より、第8軍は一步たりとも引き下からざるべし。各部隊、各人は現在の陣地において最後まで戦うべし。生きて留まることが不可能であれば、死して留まるべし」。

先の第一次エル・アラメイン戦での苦戦で厭戦気分

に陥っていた第8軍將兵に喝を入れるための、モン

トゴメリー一流の檄である。
一方で彼は、エル・アラメイン一帯に展開した令下部隊の防禦陣地の徹底的な強化に着手した。というのも、イギリス軍は枢軸軍よりも潤沢な補給を受けていることから、機動戦を得意とするドイツ軍を陣地戦に引きずり込み、できるだけ消耗させた上で、頃合いを見計らって装甲部隊一編成に着手した第10軍団等—による逆襲を仕掛け、叩き潰すという戦術を考えていたからだ。

このような発想を可能としたのは、ドイツ軍のエニ

グマ暗号を解読したウルトラ情報によってドイツ軍の内情、例えば攻勢開始の時期等がイギリス軍に筒抜けになっていたからに他ならない。

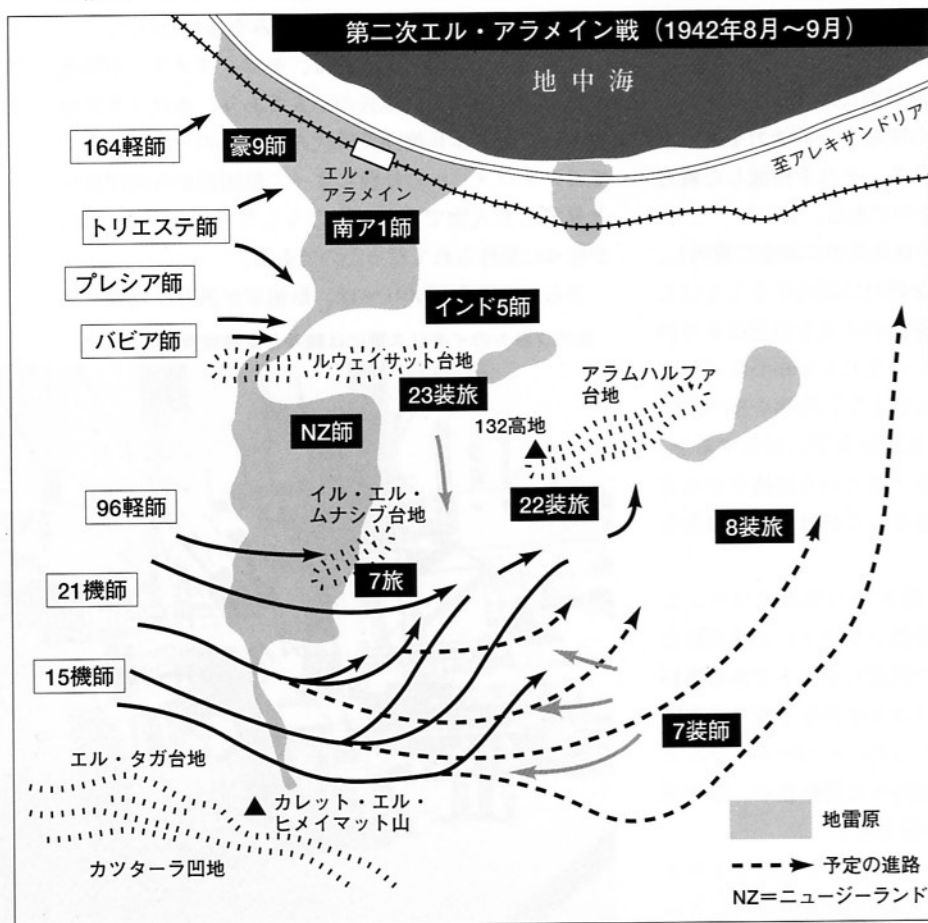
こうして機は熟し、アレキサンダー大將はただ一言、モントゴメリーに下令した。

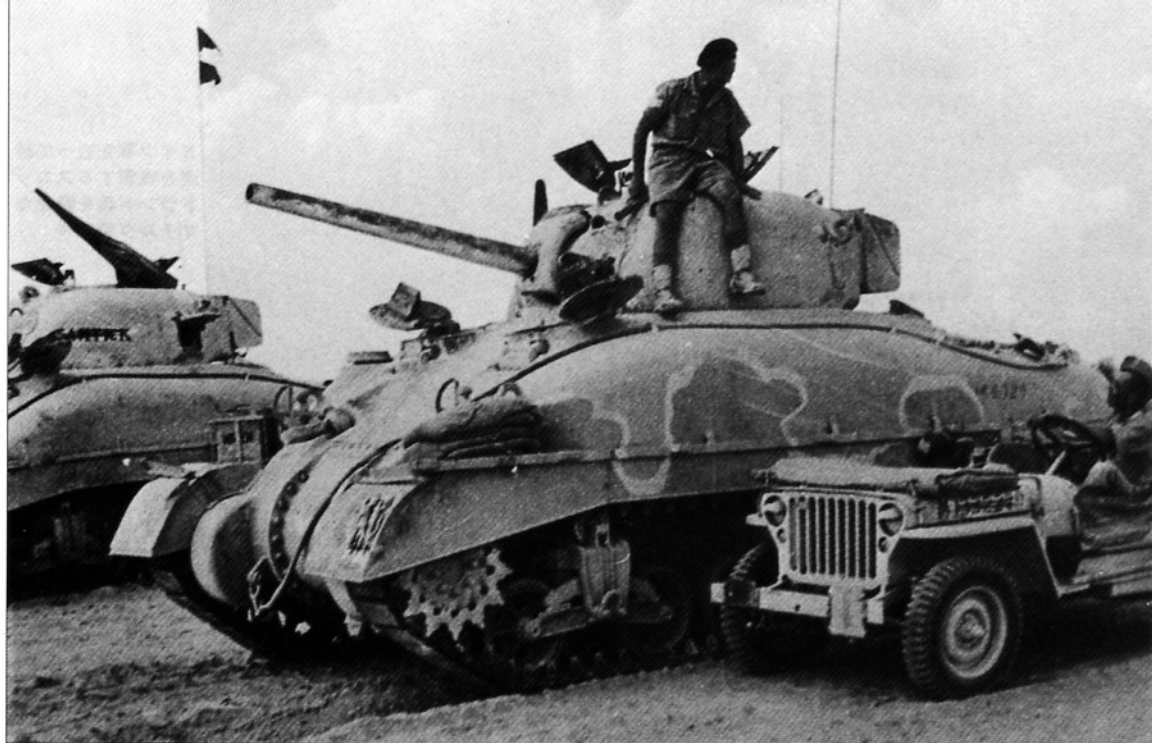
「ロンメルと枢軸軍を撃破せよ!!」

その頃、枢軸軍も第一次エル・アラメイン戦で蒙った損害の補充に尽力し、再び打って出るだけの戦力を回復していた。

§ アラム・ハルファの戦い

8月30日2300時、ルウェイサット高地とカッターラ低地の間隙にある平地を通過、アフリカ機





甲軍の攻勢が開始された。そこから、エル・アラメインの東にあるアラム・ハルファ高地の東斜面を経るルートを進み、エル・アラメイン周辺に集まったイギリス軍部隊の背後を遮断しようというのだ。

しかし、これはモントゴメリーが事前に予想していたとおりの攻勢経路であったため、枢軸軍はイギリス軍があらかじめ敷設しておいた1万8,100コにもおよぶ地雷原に入り込み、その「行き足」を大きく削がれた。さらにイギリス軍砲兵の阻止砲撃と、イギリス砂漠航空軍の阻止攻撃をまともに喰らう形となり、戦線の突破に多くの時間を費やすことになってしまった。

このようなイギリス軍による激しい防戦で、第21機甲師団長グスタフ・フォン・ビスマルク少将は搭乗した指揮車に迫撃砲弾を受けて戦死、アフリカ軍団長ヴァルター・ネーリング大将もまた、同じく指揮車が爆撃を受けて重傷を負い戦線から脱落した。

こうして、モントゴメリーの読みの正しさにより、ロンメルが企図した攻勢の奇襲効果は完全に失われ、しかも攻勢開始直後の時点で、ドイツ軍は複数の上級指揮官を失うという、以降の戦闘の推移に重大な影響を及ぼしかねない状況となってしまった。

一連のドイツ軍にとっての不幸な事態に、さらに輪をかけたのが燃料事情であった。当初から、枢軸軍にはロンメルが予定した作戦行動にどうにかギリギリの燃料しかなかったが、地雷原の突破やモントゴメリーの遅滞戦術によって予想外に燃料を消費させられた結果、アラム・ハルファ高地の東斜面へと向かう突進軸

を前進するには、燃料が心細くなってしまったのだ。しかしこれもまた、兵站線が脆弱な枢軸軍の内情を把握していたモントゴメリーの読みのおりの成り行きであった。

燃料不足を知ったロンメルは、急ぎ作戦に変更を加えた。アラム・ハルファ高地の東斜面を回り込むではなく直接同高地を奪取し、そこから真北に向けてわずかな距離を進んで地中海沿岸へと出るというシナリオに書き換えたのだ。

だが、行く手に立ち塞がった第44歩兵師団と第10装甲師団は、周到な準備に基づいて的確な阻止攻撃を実施し、枢軸軍はいたずらに損害を増やすばかりとなった。

しかも、アラム・ハルファ高地に向けて北進する枢軸モンティ（中央）とO.リース、H.ラムズデン将軍（左より）





ドイツ軍を追って砂漠を進撃するスコットランド兵を載せたマチルダ戦車→

イギリス軍が埋設した地雷はドイツ軍の進撃を遅滞させた

軸軍の兵站線の東翼から第7装甲師団が強い圧力をかけてきており、もしこの兵站線を遮断されれば、ドイツ軍の前衛部隊が孤立する危険性もあった。モントゴメリーの術策によって、ロンメルが得意とする機動戦術をまんまと封殺することに成功したのである。

予断を許さない戦況下、新たにアフリカ軍団長に就任したグスタフ・フォン・フェールスト大將は、イギリス軍の頑強な抵抗と自軍の燃料不足に鑑み、ロンメルに対して、作戦を中止し戦線の整理を実施してはどうかという意見を具申した。それまで逡巡していたロ

ンメルだったが、あてにしていた燃料の追送が受けられないという事情もあって、ついに9月1日0825時、作戦の中止と攻撃発起線までの後退を、令下の全軍に下令した。

こうして、世にいうアラム・ハルファの戦いは、イギリス軍の「守り勝ち」となった。モントゴメリーは、それまでの戦いでロンメルにしてやられてばかりで負け癖がついていた第8軍に対して、補給により兵力が充実し、訓練により練度が向上するまで、「守り」を中心にした戦いを展開して枢軸軍の力を削ぎ落とそうと

エル・アラメイン戦時の第8軍の編成 —1942年10月—

第10軍団 (H.ラムズデン中将)

- 第1装甲師団
- 第2装甲師団
- 第7自動車化旅団

第10装甲師団

- 第8装甲旅団
- 第24装甲旅団
- 第133ローリード歩兵旅団

第8装甲師団 (予備)

第13軍団 (B.Gホロックス中将)

- 第7装甲師団
- 第4装甲旅団
- 第22装甲旅団

第44ホームカントリー師団

- 第131歩兵旅団
- 第132歩兵旅団

第50ノーサンブリアン師団

- 第69歩兵旅団
- 第151歩兵旅団
- 第1ギリシア歩兵旅団

- 第1自由フランス歩兵旅団群
- 第2自由フランス歩兵旅団群

第30軍団 (オリバー・H・リース中将)

- 第4インド師団
- 第5インド歩兵旅団
- 第7インド歩兵旅団
- 第161インド歩兵旅団

第51ハイランド歩兵師団

- 第152歩兵旅団
- 第153歩兵旅団
- 第154歩兵旅団

第9オーストラリア師団

- 第20オーストラリア歩兵旅団
- 第24オーストラリア歩兵旅団
- 第26オーストラリア歩兵旅団

第2ニュージーランド師団

- 第5ニュージーランド歩兵旅団
- 第6ニュージーランド歩兵旅団
- 第9装甲旅団

第1南アフリカ師団

- 第1南アフリカ歩兵旅団
- 第2南アフリカ歩兵旅団
- 第3南アフリカ歩兵旅団

第23装甲旅団群 (予備)



考えており、それを実行した結果、ドイツ軍は息が切れてしまったのだ。

着任後初めてのロンメルとの手合わせにおいて、早々に白星を上げたモントゴメリーの名声はいやがうえにも高まった。だが当のモントゴメリーは、勝って当たり前という風情だったと伝えられる。また、すでに連合国側でも伝説化されていた強敵ロンメルを初手合わせで破ったことから、当初は彼を嫌っていたチャーチルも、その実力を評価せざるを得なくなった。

「砂漠の鷹モンティ、砂漠の狐ロンメルを破る!!」。

「ロンメルの伝説、ここに潰えたり!!」

イギリスをはじめとした連合国側のさまざまな新聞の第一面には、こんな見出しが躍った。

ちなみにモントゴメリーは、我が国では「砂漠の鼠」の愛称で呼ばれることが多い。だがこれは本来、当時の第8軍の基幹装甲兵力だった第7装甲師団の師団標識であるゼルボア（サバクトビネズミ）にちなんだ同師団の愛称であり、同師団が後にモントゴメリーの親衛隊的な存在となったため、彼自身の愛称のように流布されたに過ぎない。

砂漠における食物連鎖では、砂漠の鼠は砂漠の狐の餌であり、その点ではイギリス人一流の自虐的で皮肉っぽい愛称ではあるが、モントゴメリー自身は、砂漠の狐（もちろん砂漠の鼠も同様に）を空から狩って餌にしてしまう、食物連鎖のヒエラルキーがより高い砂漠の鷹の愛称で呼ばれることを好んだという。

§ 「ライトフット作戦」

アラム・ハルファの戦いで蒙った大きな損害の穴埋

めは、イギリス軍では着々と進んだが、枢軸軍では遅々として捗らなかった。両軍のこの差は、陸上の策源地までの距離の遠近だけでなく、地中海方面のドイツ軍を統轄する南方戦域総司令官アルバート・ケッセルリンク元帥が懸念していたマルタ島の存在も含めて、枢軸軍の兵站線が海でも陸でも常に脅かされていたことも大きく影響していた。

つまり、兵站能力に劣る枢軸軍を徹底的に消耗させ、

連絡機に乗ろうとするロンメル元帥





砂漠上に展開してドイツ軍に反撃しようとするシャーマン

こちらが先に兵力を復活させて攻勢を仕掛けるという、まさにモンゴメリーの思惑どおりの展開となったのだ。もちろん、ロンメルもそんな実情を理解していた。「攻撃こそ最大の防禦」をもって任ずるロンメルとしては、自分から仕掛けたいところだったが、いかんせん補給が追い付かない。

そこで、この先間違いなく発起されるであろうイギリス軍の攻勢を阻止するため、ハンス・ヘッカー工兵大佐の手になる「悪魔の花園」と呼ばれた強力な地雷原を含む防禦陣地を構築して、イギリス軍の攻勢を待ち構えることにした。

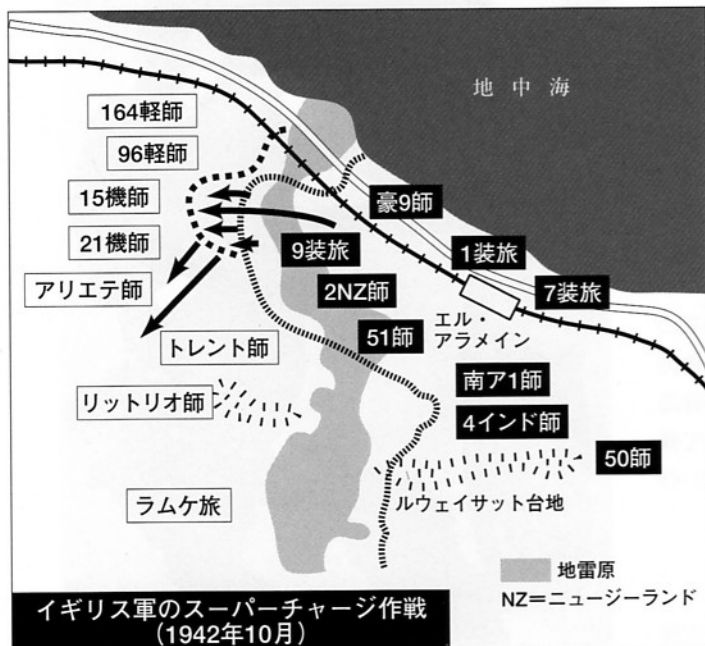
しかし長年の苛酷な戦場生活が祟って、この頃、ロンメルは体調は最悪の状態にあった。持病の肝炎と胃腸カタルが悪化、その上鼻ジフテリアにも感染しており、血清療法を受けていたがついに9月23日、病氣療養のためドイツへと帰国した。そしてこれに備えて、19日には代理として着任していたゲオルグ・シュトゥンメ上級大将に指揮権を移譲している。

一方、モンゴメリーは例のウルトラ情報によってロンメル不在を知るや攻勢の準備を急速に推進し、10月23日2130時、攻勢作戦「ライトフット」を発動した。枢軸軍よりも補給に恵まれているイギリス軍は、

極めて大規模な準備砲撃の後に前進を開始したが、防禦陣地に収まったドイツ軍も果敢な防戦を繰り広げた。また、「悪魔の花園」はイギリス軍の戦車と歩兵に大きな損害を強いた。

この激戦が始まった直後の24日朝、シュトゥンメ上級大将は副官ビュヒティング大佐と共に車で前線に向かう途中、砲撃の後に機銃掃射を受けてビュヒティング大佐が戦死し、そのショックから心臓麻痺を起こして戦病死してしまった。当初、シュトゥンメ上級大将は行方不明と報じられたため、アフリカ軍団長ヴィルヘルム・フォン・トーマ大将が臨時にアフリカ機甲軍の指揮をとることとなった。

その頃、イギリス軍の中には、枢軸軍の頑強な防戦による損害の増加と作戦の進捗の遅延に鑑みて、思い切って作戦を中止してはどうかと考える上級指揮官が増えていた。しかしモン



ゴメリーは頑として作戦の継続を主張し、予備の部隊を続々と前線に注ぎ込んで行った。

「敵よりも補給が潤沢な我々がこれほど苦しいのだから、敵はもっと苦しいだろう。だとするなら、戦場という名の吸血ポンプに、より多くの将兵を送り込んだ方に軍配が上がる」。

冷徹の一言で片付けてしまえばそれまでだが、これが現代物量戦の根底に流れる理論であり、この辺の勘どころをしっかりと押えているのが、いかにも理性的なモントゴメリーならではの考え方であった。

一方で、激戦の最中に最前線で戦う令下の部隊を視察して回り、タバコやキャンディー等の嗜好品を「吸血ポンプに送り込まれる」下級兵士達に分け与え、その士気を鼓舞することも怠らなかった。

また、モントゴメリーにとって着任後最初の戦闘となったアラム・ハルファの戦いでは、オーストラリア軍の制帽であるスロウチ・ハットを被っていたが、これには第8軍令下の総ての連隊の帽章がベタベタと付けられており、周囲に「第8軍は新任の司令官の下でひとつに結束している」というアピールをするための恰好の材料となった。

北アフリカの戦況悪化を目の当たりにして、ヒトラーはロンメルに対し北アフリカへの帰任を要請せざるを得なかった。

10月26日、再び北アフリカの土を踏んだロンメルは、



指揮官を先頭にドイツ軍陣地に突撃するイギリス兵

早速、戦況の把握と対策を講ずることとなった。すでにこの時点で大損害を蒙っていたアフリカ機甲軍を再集結させて、さらなる防戦を続けさせたのである。

§ 「スーパーチャージ作戦」

ことここに至ってもまだ頑強な抵抗を試みるドイツ軍に対して、モントゴメリーは、ただダラダラと増援兵力を投入するのではなく、状況を打破する思い切った手を打つ必要を感じていた。そこで、攻勢作戦の第二段階であり、戦果の拡大を目的として準備されていた「スーパーチャージ作戦」を11月1日2200時に発動した。

同作戦の目的は、エル・アラメインの西方に集まっ

歩兵を乗せて戦場に急ぐドイツ軍の「号戦車。砂漠ではスピードが第一だ





北アフリカの西側に
上陸したアメリカ軍
を中心とした連合軍
➡

射撃準備にかかる第
1装甲師団のブリス
ト自走砲

た枢軸軍部隊を地中海沿岸側と内陸側から包囲すると共に、両者の中間点にあるエル・アカキール高地を奪取することである。

イギリス軍が新たに攻勢を発動したことを知ったロンメルは、2日、満身創痍のアフリカ装甲軍に対して、渾身の力を振り絞った反撃を命じた。反撃はエル・アカキール高地に指向され、イギリス軍との間で大戦争戦が展開された。この激戦で彼我どちらも大損害を蒙ったが、モンテゴメリーはそれを計算の上で部隊を投入していた。

そして、イギリス軍は例によって急速な補充により消耗した戦力を速やかに回復させた。しかし補給が途絶えていた枢軸軍は損害の回復が図れず、そのせいで、

負傷兵を担いで後方へ下がるドイツ軍



以降の組織的反撃が不可能となってしまった。

もはやこれまでである。ロンメルはヒトラーにあてて撤退の許可を求めたが、その回答は「ナイン」であった。だが彼は、ことここに至っては一兵でも多くを助けることが、司令官たる自らに課せられた責務だと考えた。そして4日、ヒトラーの命令に背き、独断で全軍に対し撤退を下令したのである。この日はまた、絶望的な戦況を悲観したアフリカ軍団長トーマ大將が、イギリス軍に投降した日でもあった。翌5日、ヒトラーも戦況の深刻さを知るに及び、ついに撤退の許可をロンメルに通達している。





こうして、エル・アラメインを巡る大会戦は、枢軸軍の敗北によって終幕を見た。しかもこの戦いは、撤退が遅れたこともあって枢軸軍を再起不能にまで弱体化させるという副産物を生んだ。そのため、以降の北アフリカにおいて、枢軸軍による全面大攻勢が実施されることはついぞなかった。

12日間に及んだ戦闘により、イギリス軍は戦傷死・行方不明合わせて約1万3500名という人的損害を被った。そのため、軍団長や師団長といった上級指揮官達は暗澹たる思いにとらわれていたが、一人モントゴメリーだけは意気軒昂だった。彼にしてみれば、これらの損害は計算ずくのものであり、植民地大国であるイギリスにとって、絶対に失うことが許されない中東の要、エジプトを守り抜くためにはやむを得ない犠牲と

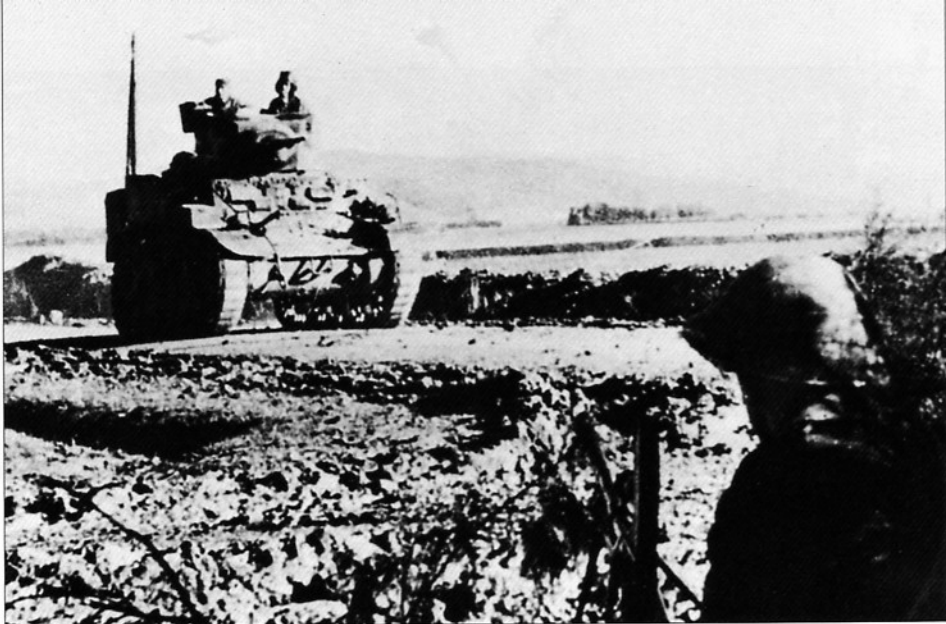
判断していたのだ。

だが、この作戦に参加した第51歩兵師団スコットランド・ハイランダーズ師団長ダグラス・ウィンバリー少将や第9装甲旅団長ジョン・カリー准将を始めとする彼の下で戦った複数の上級指揮官らが、その後第二次大戦の各時期に異口同音ながら「モントゴメリーは大義名分と自分の名誉のためなら部下の命など何とも思わない冷血漢だ」という証言をしている。

イギリス陸軍内部にも派閥があり、先に記した「モンティ家」つまりモントゴメリーの子飼いかからそのような批判が出るとは思えないが、やはりそんなことが囁かれる以上、「火のない所に煙は立たない」の諺ではないが、そういったきらいがなかったとはいいい切れないだろう。

アラメイン戦に敗れて西に後退していくドイツ・アフリカ機甲軍の車列





チュニジアで戦うM3
軽戦車とイギリス兵

西からチュニジアに
進攻したアメリカ軍
のM4とM3ハーフト
ラック⇒

ただモントゴメリーのためにいうなら、エル・アラメイン戦は北アフリカにおける戦いの天王山であった。そして天王山の戦いは、兵力が拮抗した両軍が死力を尽して戦うもので、勝った方も損害が大きいのが古今の通例である。その意味で前記したようなモントゴメリーに対する批判は少し酷に思えるのだが・・・

生成りのセーターにアスコット・タイ、オリーブ・グリーンのコールテンのスラックスというラフな服装で、「スーパーチャージ作戦」直後の従軍記者会見の席に臨んだモントゴメリーは、次のように語っている。

「実によい戦いだった。我々は絶対的な勝利を得ることができた。そう、ボッシュ（第一次大戦時のドイツ兵の蔑称だが、フランス語圏では第二次大戦中もこう称することが多かった）供をとことん叩きのめしてやったのさ」。

§ 勝者と敗者と

アメリカ第7軍司令官バットン中将（右）とモンティ



ロンメルが独断でエル・アラメイン戦線からの撤退を開始した4日後の11月8日、新たに派遣されたアメリカ軍を基幹とする北アフリカ派遣連合軍は「トーチ作戦」を発動し、アルジェリアのアルジェとオラン、モロッコのラバト、カサブランカ、サフィに上陸した。同作戦によって、ついに「眠れる巨人」アメリカが北アフリカの戦いに直接参加することになったのである。

上陸後、現地に駐留するフランス軍部隊の大多数を味方につけた北アフリカ派遣連合軍は、沿岸部を地中海沿いにチュニジアに向かって東進した。しかし初陣のアメリカ軍は、戦闘を繰り返す度に戦さ慣れしたドイツ軍に手酷く痛めつけられ、「高い勉強代」を支払わねばならなかった。

その頃、モントゴメリーは第8軍を率い、同じくチュニジアに向けて西進していた。これに対して、先のエル・アラメイン戦以来、ドイツ・アフリカ機甲軍は慢性的な補給不足となり、兵力と物資の欠乏状態から脱却することができず、踏み留まって足止めの一合戦を挑む体力もないため、西への敗走を続けるしかなかった。そして1943年1月23日、ついに第8軍は、かつて枢軸軍の一大策源地だったトリポリへの入城をはたした。

その後ロンメルは、かろうじてチュニジア南端の沿岸部のマレトからマトマタ山脈の麓にかけてマレト・ラインを構築し、第8軍の進撃を阻止しようと目論んだ。そして1943年3月6日には、反攻作戦「カプリ」を発動する。

ところがモントゴメリーは、例のウルトラ情報によってこの反撃を事前に察知しており、巧妙な迎撃戦を展開して枢軸軍に足止めをかまし、ロンメル得意の機



動戦への移行をまたしても封殺した。

その方法は、まず対戦車砲と野砲で突進してくる敵の「頭」たる戦車部隊を痛撃し、それに続く「胴体」たる歩兵と、「尻尾」たる砲兵や輜重、航空攻撃で反復して叩きのめすというもので、これにより枢軸軍は大打撃を被り、結果、ロンメルは同作戦を中止しなければならなくなってしまった。

モントゴメリーが採用したこの戦術は、「消費よりも補給が多い」という豊かな状況（つまり物量）の裏打ちがなければ成し得ないものだったが、この時の第8軍には、それだけの体力が備わっていたのである。

「カプリ作戦」から3日後の3月9日、ロンメルは機上の人となってアフリカを後にし、再び同地の土を踏むことはなかった。こうして、モントゴメリーの好敵手ロンメルは、敗北という失意を胸にリングを降りた。だがそれから約1年3カ月後、砂漠の狐と砂漠の鷹は、フランスのノルマンディーにリングを移して、再び相

まみえることになるのである。

ところで、モントゴメリーという将星は、煙草も吸わず酒も吞まず、美食にも縁がなく、その上早寝早起きを信条としており、大酒呑みで色事好みの蜚カラ調がもて囃される軍人社会には珍しい「お堅い」人柄で、明晰な分析能力と冷徹ともいえる意志、そして理論と物量に裏打ちされた総合力をもって戦いに臨むタイプであった。

とくに彼が第8軍に赴任して以降、アメリカからの豊富な補給物資が北アフリカに届くようになり、中東方面軍の台所事情は着実に好転して行った。だからこそ、モントゴメリーは彼一流のスタイルで戦い続けることができたといえる。

なお、チュニスの陥落は5月7日、チュニアの全枢軸軍が降伏したのは13日のことであった。

<エル・アラメインを巡る戦いの詳述は2006年4月号を参照> (了)

